# 火の胸

源氏鶏太

東方社版

火の胸

（乱丁・落丁の場合はお取替え致します）

昭和三十九年六月十五日発行

定価三四〇円

著作者　源氏鶏太

発行者　石渡磨須子

製版者　内田柳次郎

東京都文京区高田豊川町六〇番地

発行所　東方社

振替東京五七七七四番
電話大塚(941)一八七三番
七〇三六番

（印刷・邦文堂印刷所）

© 1964 Tohosya Printed in Japan

# 火の胸

源氏鶏太

# 目次

温情派の追剝 5
いとやせぬ 12
奉加帳 15
抜群の昇給 20
万事無難 25
親子丼 27
婿養子 31
家庭パチンコ屋 33
課長さん 45
金の怨み 50
越後屋 57

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

決闘 62
お年玉 65
腹巻 72
暴力否定 76
みかん 81
世話好き 86
庶務課勤務 95
短気は損気 102
不渡手形 109
店先の青春 119
正月早々 123
千円紙幣 141
彼の名は……148

美男コンクール 153
刑事と酒 161
新夫婦 174
いけにえ 178
電話エレジー 187
ボーナス袋出勤 191
親孝行 199
三界に家なし 203
冷房装置 213
火の胸 222

装幀　野間仁根

# 温情派の追剝

赤貧洗うが如し。しかし、丹丸さんの倉庫番としての収入がすくないからでは無い。収入は一万円を越している。奥さんと子供ふたり。だが、丹丸さんは無類の焼酎好きなのである。

丹丸さんは十年前につくつた洋服を、今でも着続けているのであつた。色はあせ、いたるところが擦り切れ、いうなれば満身創痍である。たゞし、こんな洋服だから、丹丸さんは倉庫で安心して重い荷をかたづけられた。すこしも惜しいとは感じなかつた。普通には作業衣であろうと誤解されていた。誤解されても、丹丸さんは一向苦にしなかつた。

丹丸さんの行く新宿の飲み屋では、そんな服でも別に恥でなかつた。焼酎に浮身をやつし、そのために、そんな服で通しているのだ、ということが知れているので、飲み屋の親爺は人並以上の尊敬と信頼と愛嬌をしめしてくれるのである。

「よう、丹さん。今夜も颯爽として入つて来たね。人間は心意気が何よりだ。さア、きゆうと

飲みねえ」

「嬉しいことをいうじやないか、親爺」

丹丸さんだつて、悪い気持で無かつた。

ある日の早朝、丹丸さんは奥さんに激しく揺り起された。昨夜も酔つて帰つたのである。奥さんはいつものことなので、隣の部屋で先に寝ていた。

「うるさいね。俺は今、もつとぐつすり寝ていたいのだ」

「それ所では無いのよ。あんたは昨夜、この洋服を庭に脱ぎ捨てゝ家に入つたんですか？」

「冗談じやない。俺にそんな泥酔するくらいの金があるもんか。七分三分の酔いだ。三分くらい酔つて、あとの七分でしやんと胸を張つて帰つて来たんだ」

「でもあたしが起きたら、裏の戸が開いていて、この洋服が庭に放り出してあつたわ。じやア、きつと泥棒よ」

「泥棒？」丹丸さんの睡気もはつきり醒めた。

しかし、泥棒が入つたにしては、何も盗まれていなかつた。

「だから、やつぱり、あんたが酔つて帰つて、庭と家の中を間違つたのよ。気をつけて頂戴」

と奥さんはこの時とばかりきめつけた。
「そうかなア」
と丹丸さんは半信半疑であつた。ところが、その頃になつて、急に近所が騒がしくなつた。奥さんが出かけて行つたが、やがて、顔色を変えて帰つてきた。
「あんた、やつぱり、泥棒よ。昨夜この辺、軒並に狙われて、西村さんなんか、入れ忘れた物干竿のおむつまで持つて行かれたんですつて」
「それみろ。やつぱり、俺はちやんと家で洋服を脱いで寝たんだ。それを泥棒が――」
丹丸さんは急に口をつぐんだ。しばらくたつてから、「バカにしてやがる！」と叫んだ。
「え、誰が？」
「泥棒めがだよ。おむつまで持つていつた癖に、何んで俺の洋服をいつぺん持ち出しながら、庭に捨てゝいくんだ」丹丸さんは面白くなかつた。泥棒風情に重大な侮辱を受けた思いであつた。奥さんはここぞとばかりに、
「だから、あたしがしよつちゆういうように、せめて泥棒に盗まれるような洋服を着て頂戴。四五カ月、焼酎を我慢したら、何んとか買えるじやないの」

「厭だ。こうなつたら、俺も意地だ。絶対にこの洋服で通してやる」
「まア、変な意地ですこと。あたし、そんな意地なんて聞いたこと無いわ」と、奥さんも面白くなかつた。
丹丸さんはその後も、洋服を新調しなかつた。しかし、洋服を着るたんびに、あの日の屈辱感が胸によみがえつてくる。
「バカにしてやがる。これでもまだ立派に着れる洋服なんだぞ」
ある夜、丹丸さんは例によつて、酔つぱらつて家に帰りつゝあつた。暗くて、人通りの無い道が三丁ばかり続いていた。向うから誰かのろのろと歩いてくる。丹丸さんはふらふらと歩いて行つた。そして、すれ違つた。
「おい」と、丹丸さんは呼びとめられた。
どきんとなつて振り向くと、いきなり腹のあたりにぐさつとしたものが触れてきた。相手は洋服の左ポケットに手をつゝ込んで、ピストルかドスを隠しているらしいのである。
「時計を出せ」
「な、ないよ」丹丸さんの足許がガクガクしてきた。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「チェッ」と、帽子を深くかむつた中年の追剝は舌打ちをした。「じやア、金を持つているだろう。早く、出してしまえ」
「五十円ぐらいしか無い」
「ケチな奴だ。その五十円ぐらいを出せ」
追剝は丹丸さんの出した五十円ぐらいを、ちよつと見てから、自分のポケットにいれた。
「おい、俺はダマされんぞ、もつと、あるだろう。急ぐんだから、早く、出せ」
「無いんだよ」追剝は右手で丹丸さんの洋服を探しまわつたが、出てきたのは定期券と二本残つているバットの袋とだけであつた。
「定期は返してやる。バットは貰つとく。俺はこれでも温情派なんだ」
しかし、温情派の追剝は五十円とバット二本ではどうにもいまいましくなつてきたらしく、
「おい、もつと何かあるだろう。俺はおとゝいからシケ続きなんだ」
「なア、この洋服でよかつたら持つて行け。まだ、着られるぜ」
「そうだ。じやア、その洋服を貰つてやる」
「あゝ、いゝとも」丹丸さんは欣然として上衣を脱いで、追剝の腕にのせてやつた。追剝は上

衣の目方を計るようなしぐさをした。

丹丸さんは既に大分落ちついていた。それに腕力には自信があつた。丹丸さんはこの追剝はまだ新米であることを見抜いていた。追剝でも上等の奴になると、どんな場合でも、相手の眼から決して自分の眼をはなさないものである。相手の出すものは、どしどし自分のポケットにしまい込むが、眼だけは相手を睨み続けていないと、そこに一瞬の隙が生じるのである。それをこの追剝のように一々チラッと見ているようでは、未熟者にきまつている。そこを丹丸さんの腕力で、ガンと一撃やつたら、上衣は勿論のこと五十円ぐらいと二本のバットも忽ち取り戻せるに違い無い。しかし、丹丸さんは一種の忍耐心をもつて、この追剝の去るのを待つていた。

ところが、追剝がいつたのである。

「おい、可哀そうだから、この服はお前に返してやる」

「何んでだ。まだ、着られるんだぜ」

「こんな服ではどこも買つてくれんからダメだ」

「買つてくれなかつたら、お前が着ろよ」

「俺はこんな服を着る程、まだ、落ちぶれとらん」

「何を言うか。俺は毎日、その服で会社へ通つてるんだ。失敬なこというな」
「だから、返してやる。俺はいらん」
丹丸さんは腹を立てた。
「おい、追剝なら追剝らしくしろ」
「それは俺の自由だ。気の向くまゝだ」
と、追剝はいつて、「たかゞ五十円くらいとバットで警察へ届けたら承知せんぞ」
「ふん。こんなこと、恥かしくつて、警察へいつて行けるか！」
追剝は丹丸さんの上衣をポンと投げ返すと、さつさと向うへ行つてしまつた。丹丸さんは面白くなかつた。一カ月前に泥棒に侮辱された時以上に面白くなかつた。丹丸さんはこの洋服を思い切つて、そこの川に捨てたいと思つた。

# いとやせぬ

大阪の日本橋一丁目の氷問屋、吉田禄助商店の禄助さんは、ヘソ曲りで近隣に鳴り響いていた。人使いが荒いので、四人の店員たちの不満の種が絶えなかつた。しかし、禄助さんはそんな店員たちを集めては、毎夜、一場の訓辞をこころみるのであつた。

「お前たちが毎日、こうして三度のおまんまが食べられるのは何もかもわしのお蔭である。わしの大恩を忘れてはならん。わしのためなら、いつでもいのちを捨てるぐらいの覚悟を持つとらんとあかん。ええか、分つたか！」

「はーい」

禄助さんの前に畏つた四人の店員たちは、いつせいに返辞をする。

「よし、分つたら、早く店を綺麗に片づけろ。一生懸命に働け。では、わしは、ちよつと、風呂へ行つてくる」

禄助さんがタオルを下げて店を出て行くと、店員の一人は、きつと、
「ええい、禄で無しの禄助め。癪に触つてならん」
と、叫んだ。おお、そうだとも、とあとの三人が答えて、あとは節をつけて、
「禄さんのためならいとやせぬ」
「禄さんのためならいとやせぬ」
と、やけくそみたいに合唱しながら、店を片づけるのであつた。
ある日、禄助さんは風呂が休みであつたので、早く店先まで帰つてきて、この合唱を耳にして、莞爾とした。
「おお、何と可愛げのある奴らだ」
禄助さんは、つい店員たちを宝塚の温泉に連れて行く気になつてしまつた。旅館は三流どころであつたが店員たちにとつては、薄気味悪いくらいである。酒が適当にまわつたとき、禄助さんは一同を見まわして、
「あれを合唱せえ」と、命令した。
「あれつて？」と、一人が訊くと、

「わかつてるやないか。禄さんのためなら、いとやせぬ、や」

四人は、あツと顔色を変えたが、禄助さんは上機嫌である。やがて、茶碗を箸で叩いての合唱がはじまつた。

「禄さんのためならいとやせぬ」

「おッ、その調子！」

「禄さんのためならいとやせぬ」

「もつと、もつと！」

禄さんはこの上なく満足であつた。いつか、自分も合唱の中に入つていた。

突然に、ぐらぐらツと激しく揺れた。

地震だ！

気がついたとき、四人の店員は何処かへすつ飛んでいつてしまつていて、残された禄助さん一人が、そこらをうろうろしながら、夢中でなおも、

「禄さんのためならいとやせぬ」

と、いつていたのであつた。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com